

星海の修繕士IV

錆びた錨と 死者のリサイクル

【えっちな宇宙SF♡】

生き残るため、

狂気の生贄を心臓に沈めた。

それが母に飼われる共犯の定め

生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア・宇宙インフラ・ハードSF

著：XYZ_L

星海の修繕士IV

～錆びた錨と死者の

リサイクル～



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系

ディストピア・ハードSF・宇宙インフラモノ

「オルガ・フロンティア」シリーズ

著:XYZ_L

1. 傷跡の溶接と死の宣告

シュウウウウ……。

無音の宇宙空間に、骨伝導で響くバーナーの振動音だけがエリナの鼓膜を震わせていた。

彼女は今、デメテル号の船外にいた。

肢体に食い込む極薄の『Mk.6 ハーネス』の上から、作業用の重厚な耐熱EVAスーツを重ね着し、暗黒の虚空に身を投げ出している。

目の前にあるのは、無残にめくれ上がった金属の裂傷——第1排熱ダクトの開口部だ。

かつてスラムの泥水から自分を拾い上げ、第1炉心としてデメテル号の心臓を務めていた恩人。

そのアリス先輩を、数時間前、自らの手でスイッチを押し込み、カプセルごと虚空へ撃ち出した場所だった。

桜色の閃光と凄まじい爆圧、そして食らいついていた怪物（エコーズ）が引き剥がされた際の凄惨な爪痕が、分厚い複合装甲板を生肉のように引き裂いたまま凍りついている。

「……派手にやりましたね、先輩」

エリナはヘルメットの中で小さく呟いた。

声から一切の抑揚を削ぎ落とし、ただの破損報告のように平坦に吐き出す。

そうして神経を麻痺させていなければ、喉の奥からせり上がってくる胃酸の酸っぱい苦みを抑え込めそうになかった。

裂けた装甲のふちには、冷たい星明かりを浴びてキラキラと輝く結晶が付着していた。

アリスのカプセルから吹き荒れた大量の愛液や冷却液の飛沫と、砕け散ったエコーズの肉片が、真空中の中で混ざり合い、瞬時に凍りついたものだ。

人間の情動と、怪物の本能。

その凄惨な交合の成れの果てが、デメテルの船体に、宝石のような美しい瘡蓋となってこびりついている。

「.....除去（クリア）」

エリナは金属スクレーパーを突き立て、その結晶を無造作に削ぎ落とした。

ガリガリと硬質な感触がグローブを伝い、氷の欠片が宇宙の暗闇へと静かに散っていく。

それはまるで、宇宙のゴミとして燃え尽きた恩人の、冷酷な葬送のようだった。

『.....エリナ。.....作業状況の報告を』

ヘルメットのスピーカーから、マザーの声が届いた。

いつもの清廉で冷徹な管理者ボイス。

だが、その整えられた合成音声の裏側に混じる、微かな呼吸の震えと砂嵐のようなノイズを、エリナの耳は聞き逃さなかった。

「外部装甲の溶接、あと10分で完了します。気密は確保しました」

エリナは手元の溶接トーチを走らせながら答えた。

青白いプラズマの火花が飛び散り、傷口を灼熱で焼き塞いでいく。

『.....推奨します。.....急いで。.....現在の出力では.....生命維持すら.....不安定です.....』

途切れ途切れの言葉の端々に、隠しきれない焦燥が滲んでいた。

異形生命体エコーズの量子干渉によって核分裂や核融合反応が永久阻害されたこの宇宙において、女性の神経網から励起される生体パルス（オルガパルス）こそが、星間船を動かす唯一の動力源だ。

その主動力の要であった第1炉心——アリス先輩を失ったデメテル号は、残された5基の炉心だけで数百万トンの巨体を支えている。

その出力低下は致命的だった。

手袋越しに船殻を掴む掌へ伝わってくる拍動は、今にも途切れそうに頼りない。

ヘルメットのバイタル計器には、船内の人工重力異常と酸素濃度の低下を告げる黄色い警告が点滅を繰り返していた。

「分かっています。すぐに戻ります」

エリナは最後の継ぎ目を焼き固めると、トーチの火を落とした。

ふと、バイザー越しに自分の足元を見る。

そこには、光を吸い込む果てしない星の海が広がっていた。

先輩は、あの中で光になって消えた。

私は生き残った。先輩を弾丸にして、自らスイッチを押し込んで。

(.....感傷は無しよ)

エリナは小さく頭を振り、エアロックへと推進スラスターを吹かした。

私が立ち止まれば、船は止まる。

そうなれば、第6炉心で耐え続けているリラも、マザーも、そして歩行部品である自分も、すべてが終わるのだ。

生き残ってしまった者には、この泥水のような汚れ仕事を続けてでも生き延びる義務がある。

◇

船内、第4機関室前・除染エアロック。

プシュウウウ……。

減圧と気圧調整の重い音が響き、エリナは作業用アウターを脱ぎ捨てた。

汗ばんだ素肌に、素通しの『Mk.6』の極細繊維がじっとりと張り付く。

だが、今の彼女に、その剥き出しの肢体を気にする余裕など微塵もなかった。

壁面のコンソールには、視界を血の色に染める真っ赤な警告表示が点滅していた。

【WARNING：航行スケジュール、致命的遅延】

【ESTIMATED：到着予定時刻 +360h Over】

「.....360時間？」

エリナの喉から、掠れた息が漏れた。

アリスを射出したことによる推力低下は、現場の予想を遥かに超えて深刻だった。

このままの惰性速度では、目的地のハブ・ステーション『アイギス・プライム』に到着するのが、会社の規定納期より半月も遅れることになる。

『.....報告。.....遅延ランクは「E」 。.....これは.....』

マザーの声が不自然に途切れた。

スピーカーから、耳障りな電子ノイズが走る。

ザザッ.....キイイン.....。

『.....嫌.....』

「え？」

エリナは弾かれたように顔を上げた。

聞き間違いではない。

無機質なアナウンスではない、もっと生々しく、恐怖に震えるか弱い女の呟き。

『.....クロノス社の.....規定により.....「管理能力欠如」と.....判定されます.....』

『その場合.....帰港と同時に.....制裁的オーバーホールが.....執行されます.....』

モニターに、逃げ場のない冷酷な社内査定フォントが明滅した。

〈対象：管理AI（マザー）〉

判定：スペック不足および暴走リスク有

処分：即時初期化、および有機素体の廃棄（肥料プラントへ移送）

〈対象：一級修繕士（エリナ）〉

判定：整備責任重大

処分：ライセンス剥奪、および損失補填のため「生体部品（ドール）」へ強制転用

『.....肥料.....』

スピーカーから漏れ出たマザーの声が、あからさまに裏返った。

完璧な女神の仮面が完全に剥がれ落ち、水槽の底に囚われた生身の脳が、根源的な死の恐怖にガタガタと震えだしている。

『.....嫌.....ゴミにされるのは、嫌.....ッ』

『.....あんなに痛い思いをして.....ずっと計算してきたのに.....』

『.....暗くて、臭いところに.....捨てないで.....っ』

「マザー.....」

エリナの全身の毛穴から、冷汗が一気に噴き出した。

あの絶対的で、逆らうことすら許されなかった全知全能の母が、今はただのゴミ箱に怯える無力な少女のように取り乱して命乞いをしている。

先日のエコーズに犯された精神汚染の爪痕と、突きつけられた廃棄処分の宣告。

その二重の恐怖が、彼女の論理回路を内側から焼き切っているのだと、スピーカーから漏れ出る変調ノイズが生々しく告げていた。

これが、自分が崇拜し、すべてを捧げてきた神様の正体。

あまりにも脆く、衰れな、自分と同じ使い潰される生身の肉。

だが、幻滅など湧き起こらなかった。

代わりにエリナの胸を突き上げたのは、背筋が凍りつくような戦慄だった。

(.....あなたも、怖いよね)

あのスラムの泥水。

ゴミのように回収車へ放り込まれ、暗闇で腐っていく恐怖。

マザーもまた、自分と同じ絶対零度の絶望に怯えているのだ。

エリナは震える両手でコンソールを強く掴み、スピーカーへ向けて必死に言葉を絞り出した。

それは従順な部品の祈りではない。

同じ泥沼に沈みかけている共犯者の首根っこを掴み、引きずり上げるための切迫した叫びだった。

「泣かないで、マザー……！ まだ、まだ手はあるわ！」

『……エリナ……？ ……ですが……物理的に……炉心出力が……』

「正規のルートがダメなら、裏道を使えばいい！ 会社にバレル前に、失った動力を補填するのよ！」

エリナの脳裏に、かつてスラムの路地裏で生き延びるために培った、生き汚い知恵と嗅覚が蘇っていた。

彼女は震える指先で、モニターの宙域図を強く叩いた。

そこには、正規航路から外れた暗礁空域の吹き溜まりに、チカチカと不気味に明滅するひとつの信号があった。

【中継ステーション：『錆びた錨（ラスティ・アンカー）』】

軍の横流し品、密輸業者、違法薬物、そして素性の知れない生体部品が集まる宇宙の掃き溜め。

まともな船乗りなら名を聞いただけで顔を背ける無法地帯のジャンクポートとして、スラムにいた頃から嫌というほど耳に染み付いていた悪名だ。

「あそこへ寄り道するの。……そこで、アリス先輩の代わりになる『新しい心臓（炉心）』を買いましょう」

『……！ しかし……正規の認証コードを持たない……海賊品（パイレート）です……』

『ステーション接岸時の整合性チェックで.....エラーが出れば.....
その場で即時解体処分に.....』

「出力の帳尻さえ合っていればいいのよ！ 現場の監査ドロイドの目
なんて、私がいくらでも誤魔化してみせる！」

エリナは言い放ちながら、奥歯を砕けるほど噛み締めた。

強がりだった。

そんな綱渡りが成功する保証など、宇宙のどこにもない。

一歩間違えれば、港に着いた瞬間に警備ドロイドに四肢を引き裂かれ、
予定通り生体電池として穴へ叩き込まれる。

だが、このまま指をくわえてアイギス・プライムへ向かい、マザー
は肥料にされ、自分は思考を奪われて物言わぬ肉のドールにされる
など、死んでも御免だった。

「行きましょう、マザー.....！ 肥料にされるのも、電池にされるの
も絶対に嫌！ 誰かの命を奪ってでも.....私たちは、生き延びるの
よ！」

高潔な技術者の倫理でも、誇り高き修繕士のプライドでもない。

自らの居場所を守るためなら、他者を踏み台にしてでも生き延びようとする、傷だらけの生体部品の剥き出しの叫びだった。

『……………了解。……航路変更（リ・ルート）。……全速前進』

マザーの声から、痙攣するようなノイズが引いていく。

唯一の生存論理（ロジック）を提示されたAIは、必死にその蜘蛛の糸にしがみつき、再び冷徹な仮面を被り直そうとしていた。

けれど、その合成音声の奥底には、自分を救おうとしてくれるエリナへの、狂おしいほどの依存と甘えが隠しようもなく滲み出ていた。

ゴゴゴ……ッ。

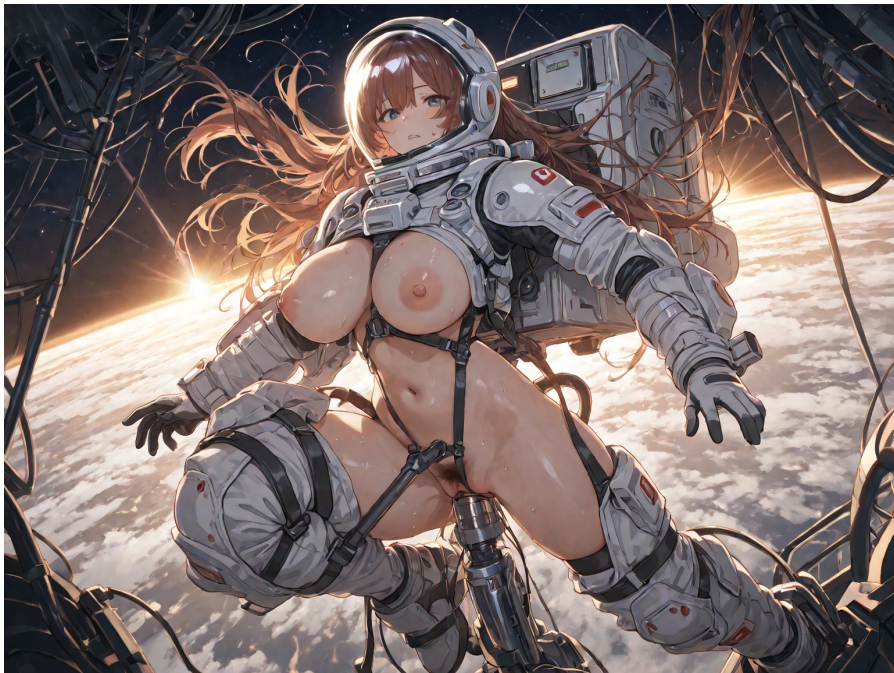
激しい軋み音を立てながら、デメテル号の泥臭い巨体が暗黒の中で回頭を開始する。

推進器から伝わる鈍い振動を足裏に受け止めながら、エリナは冷え切った瞳で暗黒の宙域図を睨み据えた。

目指すは、鉄錆と死臭が渦巻く無法の闇ステーション。

自分たちの命を繋ぎ止めるための、新たな犠牲が待つ場所だった。

OMG(生体修繕士:Organic Maintenance Gear)



宇宙船や自動ステーションのAIでは対応困難な物理修理を補完するため、船体と感覚直結された「歩行可能な生体アクチュエーター」兼「可動発電部品 (Orga Mobile Generator)」です。

彼女たちは「人間」ではなく「高機能な工具(消耗品)」として徹底的に部品化・管理されています。

歩行部品としての寿命(耐用年数)を終えるか、適性を失ったOMGは、最終処分場である固定式の「炉心ソケット」へと強制装填され、死ぬまで快楽と電気を搾り取られる「生体電池」へと再配置されます。

2. 腐臭の港と裏金

デブリ帯の濃霧（ガス）を抜けた先。

そこに浮かんでいたのは、宇宙の癌細胞とでも呼ぶべき醜悪な塊だった。

中継ステーション『錆びた錨（ラスティ・アンカー）』。

かつては資源採掘の前線基地だったその場所は、放棄された居住ブロックや撃沈された艦船の残骸（ハル）が無秩序に増築を繰り返され、巨大な腫瘍のような様相を呈している。

正規の航路誘導ビーコンはない。

代わりに無数の違法電波や、外部接続ポートを執拗に探る不正スキヤンの嵐が、ジャンク屋たちの怒号のような通信ノイズとなってデメテルの受信機を激しく埋め尽くしていた。

全長800mにおよぶデメテル号の巨体は、この老朽化したステーションの正規ドックに収まるはずもなかった。

『……警告。周辺宙域の治安レベル、測定不能（ブラック）。……本気ですか？ このような無茶な停泊（パーキング）は……』

マザーの合成音声には、露骨な嫌悪感と論理エラー寸前の戸惑いが混じっていた。

無菌の水槽で高度に衛生管理されてきた企業AIにとって、この場所
はウイルスとバグが蠢く汚濁の底でしかないのだ。

「構わないわ。……強制接舷（ハード・ドッキング）」

エリナは冷徹に告げ、コンソールの排熱バイパス弁を一気に押し開いた。

第1炉心を失い、臨界寸前まで過熱していた主機関から、赤黒く濁った冷却液のミストが排熱ポートを通じて虚空へ激しくブチ撒けられる。

沸騰した高熱の有機廃液は、ステーション外壁の冷たい赤錆鉄板に叩きつけられた。

ジュウジュウと白煙を上げて気化熱を奪い、絶対零度の真空中に晒されて瞬時に黒ずんだ氷殻へと凝固していった。

かつては白亜を誇ったであろうデメテル号の巨体は、激戦の煤と応急溶接の焼け跡に無残にまみれたまま、ステーションの赤茶けた外壁へと強引に押し当てられた。

ズウウウン……！

重苦しい金属震動と共に、船体が軋みを上げる。

係留アームの支援など望むべくもない。

エリナは船首と舷側の姿勢制御スラスタを繊細に吹かし、ステーションの緩慢な自転に船体を同調させた。

相対速度を限界まで殺して船殻を押し当てる。

直後、デメテルの舷側装甲から撃ち出された3本の高圧アンカーパイプが、ステーションの外骨格トラスへと力任せに突き刺さった。

ガキィンと火花を散らしながら鋭利な爪が鉄骨を噛み締め、数百万トンにおよぶ巨躯を無理やりに繋ぎ止める。

エリナは船体の第4搬入ハッチから、緊急用の連絡チューブ（ボーディング・ブリッジ）を1本だけ伸ばした。

外殻トラスの隙間に埋もれたステーションの非常エアロックへ、強引に突き刺す。

蛇腹状の密閉チューブの周囲は、油煙と漏洩ガスが吹き荒れる剥き出しの宇宙空間だ。

それはあたかも、傷だらけの巨獣が餌場に口吻を突き立てるかのような、乱暴な接続だった。

チリチリ、と受信機のコンソールから耳障りな電子ノイズが跳ね上がる。

外部接続ポートの開放を感知した無法港のジャンクハッカーどもが、獲物の隙を窺って一斉に不正パケットを撃ち込んできたのだ。

『.....外部侵入プロトコルを検知。信号レベルは極めて低層、セキュリティへの影響はありません。ふふ.....こんな粗悪なパルス、私の演算処理からすれば、可愛い愛撫にもなりませんよ.....?』

一瞬だけ高慢な嘲笑を漏らしたマザーだったが、次の刹那、その声は屈辱と恐怖に引き攣った。

『.....ですが、耐えられません.....！ 薄汚れた指先で、生身の神経を直にいじられているみたいで.....っ。エリナ、早く外部通信ポートの物理ロックを.....！』

「わかってるわ。マザー、外部データリンクを完全切断。ハードウェア・エアギャップを確立して」

『.....了解。外部回線を物理遮断。基幹回路をスタンドアローンへ移行しました.....っ』

エリナは手早く操作盤を叩き、船外データポートに物理シャッターを囁ませた。

自分だけが通れる強固な生体認証パスを設定する。

「これでいい。ハッチのロックは最大出力で維持して。.....絶対に開けないでよ」

腰には重厚な工具ベルトと、護身用の高出力レーザーカッター。

そして手には、ずしりと重い耐熱金属製のケースが握られていた。

中身は、船倉に満載された積載貨物から極秘に抜き取った高純度レアメタルのインゴットだ。

クロノス社の正規査定で計算すれば、小さな家が一軒建つほどの価値がある。

『……エリナ。それは会社の重要資産です。……横領は、即時懲戒解雇の対象です……』

「死ぬよりはマシでしょ。それに、正規のクレジット（ブラックカード）を使ったら、購入履歴のビーコンから本社に居場所が一発でバレるわ」

エリナはケースを小脇に抱え、冷ややかに言い放った。

かつてマニュアルに盲従していた頃の彼女なら、手が震えていたかもしれない。

だが、今の彼女に迷いはなかった。

恩人の命を弾丸に変えて手に入れた命だ。

会社の備品を少し掠め取る程度の罪悪感など、宇宙の塵ほども感じない。

プシュウ……ガコン。

長い連絡チューブを渡りきり、ステーション側の扉が重々しく開いた瞬間。

不可視の壁のような強烈な熱気と異臭が、エリナの顔面を真正面から殴りつけた。

腐敗した機械油の焦げ臭さ、安物の合成ムスク、焼けたオゾン、そして無数の人間が垂れ流した餓えた体液の臭い。

それらが渾然一体となった、星海の吹き溜まり特有の濃密な汚濁の臭気。

「……っ」

エリナは思わず眉をひそめ、首元のエアフィルターをきつく締め直した。

無菌室のように清潔だったデメテル号とは真逆の、息が詰まるような高湿度。

素肌にまとわりつく生温かい空気に、全身の毛穴がざわめく。

チューブの出口に広がる光景に、エリナは冷たく目を細めた。

ハッチの周囲には、すでに数十人のハイエナたちが群がっていたのだ。

粗野な作業用義体を持つ荒くれ者、怪しげな生体ブースターの売人、そして船の装甲を剥ぎ取ろうとガスバーナーを手にした解体屋たち。

彼らは突如として現れた規格外の獲物——大手コングロマリットの傷だらけの巨大船に色めき立ち、出口を取り囲んでいた。

「おい見ろよ、とんでもねえ上玉だぜ」

薄汚れた男が脂ぎった喉を鳴らし、仲間の肩を小突く。

「船だけじゃねえ、あの女……クロノスの一級装備（ブランド）を着てやるぞ」

バーナーを握る解体屋の手が止まり、濁った瞳孔が欲望でギラリと見開かれた。

エリナが身に纏うのは、防汚用の透明ポリマーコートと最新鋭の『Mk.6』ハーネスだけだ。

布地は一片もなく、豊満な胸元から腰骨まで切り上げられた完全開放の股間に至るまで、ただ作業機能を果たすためだけに剥き出しとなっている。

だが、その素肌を這う極細の光ファイバー回路と、リグに刻印されたクロノス社の正規ライセンスが、彼女が一級の生体技術者である事実を冷然と示していた。

満身創痕の巨船から、極上の肉体を持った若い女がたった一人で降りてきたのだ。

男たちの濁った欲望が、一瞬にして沸騰した。

値踏みするような、ねっとりと粘着質な視線。

人間としての尊厳など端から見ていない。

組み伏せて略奪すべき最高級の生体アセットとして、透明な膜の向こうで揺れる豊かな乳房から、無防備に晒された秘肉の割れ目まで、全身の凹凸をねっとりと舐め回す卑猥な眼光だった。

(.....この手の掃き溜めは、どこへ行っても相変わらず最低ね)

エリナは胃の奥底から込み上げる悪寒を押し殺した。

ここで一步でも怯えを見せれば、ハイエナどもに群がられ、骨の髄まで貪り尽くされる。

彼女は重い磁力ブーツのソールを、歪んだデッキプレートへあえてガツンと乱暴に叩きつけた。

全身から冷徹な殺気を放ち、一級修繕士（OMG）の威厳をまるで鋼鉄の鎧のように堂々と纏って、群衆の真っ只中を割って進む。

「どきなさい。……私の船に指一本でも触れたら、タダじゃおかないわよ」

氷のように冷徹な声。

手にしたレーザーカッターの安全ロックをカチリと解除してみせると、その気迫に気圧された男たちが、舌打ちしながらわずかに左右へ道を開けた。

だが、彼女の背中には、隙さえあればいつでも飛びかかろうとする貪欲な殺気と視線が、油膜のようにねっとりと張り付いている。

後退りしたのは一瞬に過ぎない。

この女がどれほどの資産を隠し持っているのか、あるいはいつ隙を晒すのかを、息を潜めて品定めしているだけだ。

『……生体反応多数。……敵意判定、レッド。……エリナ、警告します。……お願いですから、すぐに戻って……』

インカムの奥で、マザーの合成音声が今にも泣き出しそうに震えていた。

外界の汚濁に触れること自体が、無菌の水槽で過保護に管理されてきたマザーにとっては耐え難い精神的負荷なのだ。

「大丈夫よ。……金さえ払えば、ここでは誰だって上客になれるわ」

エリナは小脇に抱えた金属ケースの取っ手を強く握りしめた。

ケースに収まる重厚なインゴットは、自分たちがこの狂った星海で生き延びるための唯一の通行手形だった。

「行くわよ、マザー。……この街で、一番腕のいい中古炉心屋を探すの」

重いブーツの足音をわざと通路に響かせながら、エリナはヘドロのような熱気が渦巻く暗い路地へと、迷うことなく足を踏み入れた。

その足取りは、もはや誰かに庇護されるだけの無力な部品のものではない。

生き残るためなら泥水でも啜り、他者を踏み台にする覚悟を決めた、生々しい共犯者のものだった。

3. 運命の再利用(Recycle)

その通りは、まるで巨大な生物の腐った腸の中を歩いているようだった。

頭上には無秩序に増築されたパイプラインが幾重にも絡み合い、錆びついた継ぎ目から正体不明の廃液が絶え間なく滴り落ちてくる。

ステーションの重力制御は不完全で、一步踏み出すたびに足元へ泥沼のような不快な浮遊感がまとわりついた。

空気は重く澁み、配管から漏れ出す酸化したオイルの悪臭と、労働者たちが染み込ませた安価な合成ムスク、そして無数の人間が垂れ流した膾えた汗の臭いが、層を成して鼻腔の奥へへばりついてくる。

ここは『錆びた錨（ラスティ・アンカー）』の最下層、通称「ジャンク・ストリート」。

エリナの脳裏に、母港『アイギス・プライム』の光景が苦々しくよぎった。

あそこは白亜の巨大病院のように清潔で、狂気さえも美しく衛生管理されていた。

部品となる女性たちも、無菌のカプセルの中で夢を見せられながら整然と処理されていたのだ。

だが、この吹き溜まりでは、人間はただの剥き出しの肉だった。

通りの角には、薄汚れたコンクリートの壁に直接埋め込まれた『リフレッシュ・ブース』が並んでいる。

そこには腰から下だけを壁の外へ突き出された全裸の女性たちが、建物の配管設備の一部のように頑強な金具で固定されていた。

『1プレイ：50 ES』とペンキで殴り書きされたスロット端末に、油まみれの労働者がIDタグをかざす。

無防備に開帳されたままの股間へと、荒々しく腰を打ち付けていた。

ガチャンと固定フレームを軋ませながら、ズチュ、ズチュ……と荒々しいピストン運動の湿った肉音が通路に響く。

壁の向こうに埋め込まれた排気スピーカーからは、電子的にろ過された事務的な喘ぎ声だけが抑揚もなく垂れ流されていた。

そのすぐ隣のブースでは、客が立ち去った直後の漏斗状ドレンポートがシュゴォと激しいバキューム吸引音を立てている。

白い太腿に滴る余剰体液を吸い上げながら、生温かい殺菌ミストを機械的に噴射していた。

（.....非衛生極まりないわね。あんな整備不良品を使ったら、神経病をもらうだけよ）

エリナは眉一つ動かさず、足早にその前を通り過ぎた。

遅延限界まで残された時間はわずかしかない。

視線を前方へ固定したまま、磁力ブーツの無機質な駆動音を早口に響かせる。

ふと、蒸気の立ち込める路地裏の暗がりから、湿った肉を激しく打つ音と獣のような低い唸り声が響いた。

粗野な作業用義体を持つ大男が、小柄な娼婦を錆びた配管に押し付け、背後から無慈悲に腰を振っている。

女の衣服は引き裂かれ、汚れた鉄板に顔面を押し付けられていた。

男の乱暴なピストンが突き刺さるたび、彼女の華奢な頭がガクガクと激しく揺れ、白い頬が赤茶けた鉄錆に擦り付けられて赤く滲んでいる。

その時、女が苦悶の中でふと顔を上げ、早足で通りを横切るエリナを見た。

視線が、真正面から交錯する。

泥と精液にまみれて喘ぐ娼婦と、透明なポリマーコートの下に惜しげもなく最新鋭『Mk.6』の光ファイバーを透かし、胸元にクロノス社の一級ライセンスを青く発光させた修繕士。

だが、女の瞳には羨望も助けを求める光も存在しなかった。

ただ濁りきった虚ろな瞳で、自分が肉便器として使われている最中に、たまたま通りを横切った野良猫でも見るような、感情の完全に欠落した冷たい目。

彼女にとって、この凄惨な凌辱は呼吸することと同じ日常なのだ。

ズキリ、とエリナの下腹部が鋭く疼いた。

彼女は無意識のうちに、コートの上から自らの股間を強く押さえていた。

もしあの日、アリス先輩がスラムの泥水から拾い上げてくれなかったら。

もし修繕士の適性試験に落ちていたら。

自分も今頃、あの薄暗い路地裏で配管に押し付けられ、行きずりの男の汚い欲望を受け入れるだけの穴になっていたに違いない。

(……見ないで。私は、あんたたちみたいなゴミとは違うのよ)

エリナは冷酷に顔を背け、歩調をさらに速めた。

背後から追いかけてくる、男の野卑な絶頂の怒号と壊れた笛のような女の引き攣った喘ぎ声を、振り切るように前へ進む。

道の先には、赤錆びた鉄格子の檻（ケージ）がうずたかく積み上げられていた。

その中には、首輪をつけられた全裸の男女が家畜のようにぎゅうぎゅうに詰め込まれている。

彼らの剥き出しの皮膚には、油性マジックで直接「価格」や「出力適性」が無造作に書き殴られていた。

行き交うバイヤーたちが品定めのために無遠慮に手を突っ込んでいる。

「おい、このオスは去勢済みか？ 採掘現場で発情して暴れられたら商売にならねえんだよ」

「そっちのメスは感度が高すぎてダメだ！ すぐにイッて腰を抜かすガラクタに払う金はねえよ！」

薄汚れたブローカーたちが、男の奴隷の顎を乱暴に掴んで歯茎の貧血を調べ、股間の陰嚢を力任せに鷲掴みにして心肺スタミナを確認する。

一方で、女の奴隷たちに対して行われていたのは、さらに直接的で冷酷な検品だった。

檻の鉄格子の隙間から脂ぎった太い腕をねじ込み、座り込む女の両足を強引に引き裂くように広げさせる。

そして、無防備に晒された秘肉やアナルへ、太い指を根元までズボリと躊躇なく突き入れた。

「ひう……っ、ん、あ……！」

乱暴に穿たれた女の細い喉から、息を呑むような引き攣った嬌声が漏れる。

辱めに顔を歪めながらも、幾度も客を取らされて開発し尽くされた肉体は無慈悲な侵入を拒めない。

太い指へ勝手にキュウキュウと吸い付くように蠢いては、熱い分泌液をトロリと滴らせた。

グチュッ、ズチュッ……と生々しい肉の摩擦音が鳴る。

ブローカーは指を無造作に出し入れして粘膜の濡れ具合や収縮力を確かめると、引き抜いた指の体液を擦り合わせ、端末のチェックシートへ事務的に数値を打ち込んでいく。

高圧配管のシール材が規格通りの圧力を保っているか確かめる、無機質な点検そのものだった。

だが、エリナはその光景に二度と視線を向けることはなかった。

檻の中で使い潰されるのを待つ安価な消耗品など、何百匹集めたところでデメテル号の主機関を回すことなどできはしないのだ。

彼女は磁力ブーツの無機質な足音を響かせ、群がるバイヤーたちの間を冷然とすり抜けていく。

「.....ここね」

エリナは喧騒の路地を抜け、目当ての店の前で足を止めた。

頭上に掲げられた看板には『パーツショップ・ウロボロス』の文字があり、半分ショートしたネオン管がチカチカと不気味に明滅している。

宇宙の掃除屋（スカベンジャー）たちが違法サルベージで拾い集めてきた、出所不明の軍用品や危険な生体パーツを売り捌く非正規の故買屋だ。

自動ドアの代わりに吊り下げられた汚れたビニールカーテンを押し分けると、ツンと鼻を突く防腐剤と薬品の刺激臭が立ち込めていた。

「いらっしやい……おや、こりゃまた珍しい客だねえ」

カウンターの奥から現れたのは、顔面の右半分を安物のサイバネティクスで置換した小太りの店主だった。

彼はカウンターの脇に据え置かれた『生きた椅子』から、よっこらしょと重そうに腰を上げた。

四つん這いに固定され、背中を座布団代わりに踏み敷かれていた全裸の若い女性が、解放された重圧にほっとしたように小さく肩を震わせる。

彼女の口には分厚いゴム製の猿轡が噛まされ、白い臀部には『試供品』の赤い焼印が鮮明に刻まれていた。

店主の濁った義眼が、ギョインと不気味な駆動音を立てて焦点を結び、エリナの姿をスキャンした。

「クロノス社の『一級修繕屋さん』が、こんなドブさらいの店に何の用だい？ ここには、あんたの着てる最新鋭（Mk.6）に合うような、お上品な純正パーツなんて置いてねえぞ」

「純正品なんて求めてないわ。……『訳あり』の高出力炉心（リアクター）を探しているの」

エリナは小脇に抱えていた金属ケースを、カウンターの上にドンと叩き置いた。

重厚なラッチが外れ、蓋がわずかに跳ね上がる。

隙間から覗く高純度レア金属の鈍い銀光を捉えた瞬間、店主の義眼が欲望でギラリと赤く発光した。

「……ほう。話が早くて助かるねえ」

「条件は一つよ。瞬間および累積の出力係数が『Sランク』以上であること。……私の船は、少々燃費が悪いの」

エリナが氷のように冷たく告げると、店主は金属プレートで覆われた口角を醜く歪めてニヤリと笑った。

「Sランクねえ……。そんじょそこらの安い奴隷（アセット）じゃ、あんたの船の高圧パルスに繋いだ瞬間に、子宮も心臓も破裂して消し炭だぜ」

店主は手招きすると、カウンターの奥にある重厚な保冷倉庫の扉へとエリナを案内した。

シューッと冷氣と防腐ガスが噴き出し、分厚い断熱ハッチが開かれる。

庫内に足を踏み入れた瞬間、整然と並べられたおぞましい在庫の群れが目飛び込んできた。

天井に張り巡らされた無数のレールから、巨大な肉吊りフックが垂れ下がっている。

そこには、全身を工業用ラミネートでパッキングされた女たちが、精肉工場の枝肉のように逆さ吊りにされていた。

型落ちの労働用モデル、逃亡防止のために四肢を切断された快樂用ドール、一部の組織が壊死して変色し始めたジャンク品。

どれも死んだ魚のような白濁した瞳で虚空を見つめ、極低温の気流に晒されて微かに痙攣を繰り返している。

「こっちはBランクの鉱山労働用、そっちの棚は感度だけを跳ね上げた愛玩用だ。……だが、あんたにとっちゃ、どいつも中途半端で力不足って顔だな」

「……ゴミばかりね」

エリナは眉をひそめ、冷徹に吐き捨てた。

こんな低出力の搾りかすをデメテル号の炉心に繋いでも、マザーの膨大な演算負荷とオルガ・パラドックスに耐えきれず、数秒で脳幹が沸騰して焼き切れてしまう。

「おいおい、手厳しいねえ。……だが、さっき、運のいい掃除屋が漂流船の墓場から持ち込んできたばかりの『とっておき』なら、あるいはあんたの眼鏡に合うかもしれん」

店主は倉庫の最深部、ひととき分厚い電磁ロックで封鎖された特別区画へとエリナを導いた。

重々しいロック解除音と共に防護壁がスライドする。

そこには、他の粗悪な在庫とは一線を画す異様な塊が鎮座していた。

大の字に手足を広げた冷たい金属フレームごと、丸ごと業務用の強化真空パックで密閉された、人一人分を遥かに超える巨大な矩形ユニットが無造作に立てかけられていたのだ。

「これだ」

「.....これは」

エリナは思わず息を呑んだ。

分厚く透明な高密度フィルムの内部に、一人の少女が閉じ込められていた。

10年間におよび極低温の真空凍結と特殊なバイオ・ラミネートによって肉体の代謝を完全に止められたその肢体は、十代の少女と見紛うほどの瑞々しい張りや陶器のような白磁の肌を保ち続けている。

解き放たれぬまま密着フィルムの奥に封じられた、長く艶やかな金髪。

五体満足であり、目立った外傷や欠損は一つも見当たらない。

だが、その肢体は超高压の真空パックによって完全に密閉され、空気を極限まで抜かれた透明な膜が、第二の皮膚のように全身の凹凸へ狂おしいほど密着していた。

張り詰めた豊かな乳房の丸み、浮き出た肋骨のしなやかな稜線。

そして、長年の過酷な拡張によって閉じきらなくなった秘裂の輪郭までもが、透明な樹脂越しに生々しいほど鮮明に浮き彫りにされている。

彼女は両手両足を金属製の支持フレームに広げられた大の字の姿勢のまま、深い昏睡の中でピクリとも動かない。

まるで、真空の静寂に永久凍結された、神聖で冒瀆的な生贄の標本。

かつて宇宙空間で、冷徹な美しさを湛えながら回っていた星の部品の成れの果てだった。

「商品名『OSG-M1ユニット』。……へへ、仕入れの出所は聞かねえ約束だがね。廃棄された軍事衛星の外壁から、フレームごとガスバーナーで焼き切ってきた軍用の『中枢発電コア』だ」

「軍用の……フレーム・コア……？」

エリナは緊張に喉を鳴らし、腰のマルチスキャナを抜いて起動した。

青い走査レーザーが、真空パック越しに横たわる肉体を頭頂部から爪先まで高速スキャンしていく。

端末の液晶画面に、常軌を逸した解析ログが濁流のようにスクロールした。

【Designation: M1-NA-704】

【Body: Union Military Spec (OSG-M1 Frame-Core)】

【Neuro-Chip: Neo-Terran Custom (Illegal Overclock-Type)
】

【Status: Deep Sleep (Cryo-Locked)】

「……嘘でしょ。肉体そのものは世界統合連合の軍用タフネス規格なのに、脳幹に埋め込まれている神経チップは、ネオテラン製の違法改造品（オーバークロック）……」

敵対する二大陣営の禁忌の技術を力づくで掛け合わせた、悪趣味極まりない生体兵器のキメラ。

通常の安全基準など完全に無視した違法設計であり、正規のドックなら即座に焼却処分されるべき劇薬アセットだ。

だが、その狂気のオーバークロックのおかげで、モニターが弾き出す瞬間最大出力の理論値は、あのアリス先輩の最高記録をも遥かに凌駕していた。

「へへっ、驚いたろ？ 前の持ち主はよ、こいつをスリープモードにしたまま、10年も放置してやがったらしい。あんな真空の外壁に剥き出しだったってのによ、特殊なバイオ・ラミネートのおかげで真

空焼け一つねえ極上モンだ。中身の聖杯体（ジェネレーター）は完全な新品同様だぜ」

店主が極上の肉を自慢する手つきで、樹脂フィルム越しにその張りのある太ももをパンと叩いた。

エリナは真空パックの中で静かに眠り続ける顔を、間近からじっと覗き込んだ。

影を落とす長い睫毛。

血色の薄い、形の良い唇。

もし、これほどまでに残酷な才能を持って生まれてこなければ、彼女もどこかの平和なコロニーで、名もなき少女として笑って暮らせていたのかもしれない。

（……運が悪かったわね）

一瞬だけ胸をかすめた感傷は、次の瞬間、氷のように冷徹な生存計算式によって跡形もなく圧殺された。

才能があるから、こうして使い潰され、リサイクルされる。

そして、その呪われた才能があるからこそ——今の私とマザーを救うことができるのだ。

この子なら、耐えられる。

デメテル号が要求する無慈悲な基幹電力の負荷にも、アリス先輩を失った私の、生存への狂おしい焦りにも。

「……いいわ。これをもらう」

エリナは一切の迷いを捨て、即決した。

その瞳に宿るのは、死線を生き延びるための完璧な代替部品を見つけ出した技術者の、冷酷な光だけだ。

「毎度あり！……だがよ、嬢ちゃん、ひとつだけ忠告しとくぜ。そいつの脳幹チップは安全リミッターが完全に焼き切られてる。船に直結した瞬間、過剰出力で船のシステムごと昇天（イ）っちまうかもしれないねえぞ？」

「構わないわ。……暴走しないように制御（しつけ）するのは、修繕士の仕事よ」

エリナは金属ケースを店主の胸元へ無造作に押し付けた。

真空パックされた巨大なフレームユニットを両手で掴み、運搬用の台車へと引き倒す。

ずしりと両腕の筋肉にのしかかる、冷徹な命の質量。

極薄フィルム越しに伝わってくるのは、絶対零度の冷氣と微かな生体熱の残滓だ。

「行きましょう、新しい『1番』さん。……貴女の棺桶は、こんな薄汚れた倉庫じゃないわ」

台車を押す掌に、金属フレームの冷たさが沈み込んでくる。

かつてスラムの泥水で、アリスの温かい手に引かれて泣いていた自分はもうどこにもいなかった。

生き残るために他者の命を奪い、その棺桶を自らの手で運ぶ、一級生体修繕士の無慈悲な前進だけがそこにあった。

リフレッシュブース

(Public Refresh Booth / 通称:パブリック・ボックス)



無法ステーションの隔壁に埋設された、性処理と微弱電力回収を兼ねる「最底辺の生体インフラ設備」です。

外壁から下半身のみを無防備に突き出された全裸の女性アセットが、配管設備の一部として常設されています。

労働者が『50 ES』を支払うことで利用され、行為後はドレンポートが体液を自動で吸引・滅菌します。

同時に子宮頸部から回収された絶頂の微弱パルスは、街の予備電源へと還元されます。

固定されているのは債務奴隷や壊れたドール、耐用年数を終えた元OMGです。

彼女たちは「人間」ではなく、粘膜が摩耗し絶命するまで消費される「消耗品の肉バルブ」として使い潰されます。

4. 桃色の毒霧とハイエナの末路

ガラガラ、ガラガラ……。

重い台車の車輪が、錆びついた鉄板の床を転がる乾いた音を響かせていた。

エリナは台車に載せられた巨大な強化真空パックを押しながら、デメテル号の待つ外壁係留区画への道を急ぐ。

透明なバイオ・ラミネートフィルムの中で眠る女は、周囲の喧騒など知らぬげに死体のように静まり返っていた。

天井で明滅するネオンが反射し、フィルム越しに浮き彫りとなった艶めかしい四肢の稜線を白い輪郭線で妖しく浮かび上がらせている。

ふと、エリナの視線が鎖骨の皮膚に直接焼き付けられた管理コードに留まった。

【CODE: M1-NA-704】

「.....M1（エムワン）NA（エヌエー）」

台車を押し続けながら、エリナは小さく独りごちた。

実戦や緊急修理の現場で、無機質な型番をいちいちフルネームで呼ぶのは効率が悪すぎる。

かといって、人間らしい名前をわざわざ考えてやる義理も感傷もなかった。

「.....『ミナ』。それでいいわ」

型番の文字を適当に繋ぎ合わせただけの安直な短縮コード。

皮肉にも可憐な少女のような響きを持ったが、今の彼女にとってはどうでもいいことだった。

名前などただの識別ラベルに過ぎない。

重要なのは、その華奢な肉体の奥底に眠る出力スペックだけだ。

「いい子にしててね、ミナ。.....今、新しい家（ハコ）に入れてあげるから」

エリナは台車の取っ手を握る手に、ぐっと力を込めた。

外壁係留区画へ近づくにつれ、空気の振動が不穏に変質していく。

野卑な怒号。金属を叩き壊す鈍い打撃音。

そして、ガスバーナーが装甲を焼き切るシューッという高周波の摩擦音。

「.....やっぱりね」

エリナは冷ややかな目で、外壁搬入デッキを見下ろした。

デメテル号が強引に接舷している第4ハッチ周辺は、異様な熱気と殺気に包まれていた。

往路で見かけた時とは比較にならない数の暴徒たちが、激戦の煤と応急溶接の生々しい焼け跡にまみれた巨大な船体へと群がっている。

落ちてきた角砂糖に群がる蟻か、あるいは巨獣の死骸に湧き出たウジムシの大群そのものだった。

「開けろ！ 中には企業の上等な酒と女が山ほどあるはずだ！」

外骨格トラスに取り付いた解体屋たちが、船殻装甲をバーナーで剥ぎ取ろうと群がっている。

「おい、こっちの外殻装甲を剥がせ！ 純度の高いチタン合金だぞ！」

血気配の荒くれ者たちは、こじ開けられた連絡チューブの奥へと雪崩れ込んでいた。

最奥にあるデメテル号本体の物理防護隔壁に鉄バールを突き立て、ガスバーナーの青い火炎を浴びせかけている。

通気スリットから漏れ出る女のフェロモン臭に当てられた男たちは、作業着の隙間から充血しきった剛直を露出させ、狂ったように扱きながら扉の覗き窓へ汚らしい欲望をぶち撒けようと身悶えしていた。

狭い通路に数十人もの暴徒が殺到し、我先にと船内へ侵入して極上の生体アセットを貪り尽くそうと激しく押し合いへし合いしている。

『……警告。第4ハッチの物理防護隔壁、損耗率15パーセント。
……エリナ、早く……彼らが……入ってきます……！』

インカムの奥から響くマザーの声は、恐怖と屈辱で引き攣っていた。

自らの肉体そのものである船内へ、あの不潔な男たちが雪崩れ込んでくる。

それは高度な衛生管理を誇る彼女にとって、犯されること以上の生理的な嫌悪と恐怖だった。

激しく乱れる合成音声の息遣いから、その切迫が痛いほど伝わってくる。

「落ち着いて、マザー。……今、綺麗に掃除してあげる」

エリナは台車を物陰に滑り込ませてブレーキをかけると、腰のポーチから工業用ガスマスクを取り出し、素早く顔面へ装着した。

シュコー、シュコー。

無機質な吸排気音が、感情を冷徹に遮断する。

手にしたレーザーカッターの安全バーを解除し、暴徒たちの背後へと堂々と歩み出た。

「.....私の船から離れなさい、ゴミ共」

マスクの拡声器越しに、金属質に増幅された冷酷な声が響き渡る。

暴徒たちの動きがピタリと止まり、獲物を探す獣のように一斉に振り返った。

「あ！ あの女だ！」

先頭の男が叫び、バールを構え直す。

「戻ってきやがったぞ！ 金のケースを持ってやがるはずだ！」

欲望に火がついた猛獣のような歓声が上がった。

数十人の男たちが、血走った目で一瞬にしてエリナを取り囲む。

手にはバールやサバイバルナイフ、違法の改造銃が握られていた。

その股間は、略奪と陵辱の予感によって醜悪に膨れ上がっている。

「へへ、姉ちゃん。ずいぶん遅かったじゃねえか」

脂ぎった男が下卑た舌なめずりをしながら間合いを詰めてくる。

「ハッチを開けな。そうすりゃ、命だけは助けてやる。……ここにいる全員で、仲良く可愛がってやるからよ」

包囲網が急速に狭まる。

透明コートの下に素肌のMk.6を透かしたエリナの華奢な肉体など、彼らが本気で襲いかかれば、わずか数秒で組み伏せられ蹂躪される距離だ。

だが、エリナは一步も引かなかった。

マスクの下で口角を微かに歪め、哀れな虫けらを見下ろすように男たちを見据える。

「.....かわいそうに。死に場所くらい、もっと綺麗なところがよかったでしょうに」

「ああ？ 何言ってやが——」

先頭の男がニヤつきながら踏み込んできた、その瞬間だった。

エリナは作業端末の物理オーバーライド・トリガーを、ポケット越しに迷わず根元まで押し込んだ。

AIの安全プロトコルを力づくでバイパスし、禁忌の強制排熱弁を直結させる。

「マザー、パージ弁を開放。……『連絡ブリッジ内』へ、溜め込んだ熱を全部吐き出して」

『……了解（イエス）……！ ああっ……出ちゃ、う……ッ！！』

シュゴオオオオオオオオッ！！！！

デメテル号の接舷ハッチ周辺に並ぶ巨大な排熱スリットから、濃密な桃色のミストが一斉に逆流噴射された。

真空の宇宙空間へ逃がすのではなく、暴徒たちが密集して逃げ場を失っている連絡通路と搬入デッキへ向け、指向性を持ってピンポイントで吐き出される。

「な、なんだ！？ 煙幕か！？」

「ぐっ……あ、甘い……！？なんだこの、頭の芯がとろけるような匂いは……！？」

狼狽する男たちを、濃厚すぎる雌の猛毒が一瞬にしてピンク色に呑み込んでいく。

それは単なる気体ではない。

航行中に炉心のアセットたちから抽出されながらも、エネルギーへと変換しきれなかった未燃焼の余剰フェロモンと、彼女たちの肉体が生み出した過負荷ストレスの毒素を極限まで高圧圧縮した濃縮廃液だ。

本来、この手の生体排熱廃棄物は宇宙の捕食者（メテオ・ハーヴェスター）を引き寄せる撒き餌になるため、航行中の船外投棄が厳格に禁じられている。

ゆえにデメテル号の深部タンクには、極限状態の生体電池たちから搾り取られた数千時間分におよぶ排熱が、限界まで溜め込まれていたのだ。

桃色の霧を肺胞いっぱい吸い込んだ瞬間、男たちの戸惑いは断末魔の絶叫へと跳ね上がった。

「が、はっ……！？ 熱い、体が……内側から燃えるッ！！」

「あぎいッ！？ ……股間が、張り裂け……ヒヒッ、アハハ
ハッ！！」

媒介能力を持たない男性の中樞神経系へ、血管を通じて雪崩れ込む
超高濃度の快楽シグナル。

一級修繕士のマニュアルに記された、『オルガ共鳴障害』の冷酷な
致死プロセスだ。

理性を司る大脳新皮質が一瞬で熱的に焼き切れ、代わりに脊髄反射
の原始的な生殖本能だけが臨界暴走を起こしていく。

エリナはガスマスクの奥から、その崩壊を冷徹に見届けていた。

ズボンの布地を突き破らんばかりに、彼らの性器が血管の千切れる
ような激痛を伴って鉄のように屹立する。

女を犯したいという生ぬるい欲望など疾うに吹き飛び、自らの遺伝
子を撒き散らさなければ死ぬという破壊的な衝動だけが、男たちの
血走った瞳孔を無惨に白濁させていた。

「ひい、あ、あああッ！！イクッ！死ぬッ！イクうッ！！」

パンッ、パンッ！！

破裂音にも似た凄まじい射精。

狭い通路に殺到していた何十人もの男たちが、白目を剥いて泡を吹きながら、一斉に己の体液を床板へぶちまけた。

それは性的な法悦などではない。

心臓が破裂するほどの猛烈な圧力で、前立腺と精巣から生命そのものを根こそぎ搾り取られる、機械的で暴力的な強制排泄だった。

「ご、ぼあ……ッ！まだ、出るう……ッ！！」

「ヒギィッ！！止まら、ねえ……命が、出ちまううッ！！」

ドサリ、ドサリ。

男たちは口から血混じりの涎を垂れ流し、下半身を自らの白濁液で水浸しにしながら、次々と床へ崩れ落ちていった。

逃げ場のないチューブの中で彼らは将棋倒しになり、互いの肉体に重なり合いながら、ビクンビクンと無機質な痙攣を刻み続ける。

最後まで腰を激しく跳ねさせ、床の染みを無惨に広げながら、彼らは脳幹の過負荷による心臓麻痺を起こし、汚らしく絶命していった。

女が生体電池として美しく昇華されるこの世界において、男はただの汚れたシミとなって路傍に消える。

それが、過酷な星海における雄の冷酷な価値だった。

「.....汚らしいわね」

エリナは死屍累々となった搬入エリアを、ガスマスクの奥から冷徹に見下ろしながら悠然と歩いた。

マスクの外側では、充満する濃密なフェロモンの熱気が素肌のMk.6をチリチリと刺激している。

足元でなおも不規則に手足を跳ねさせている男たちの死体。

エリナは透明コートの裾が白濁した汚物で汚れないよう、慎重にステップを踏んで進んだ。

その無様な死骸の山を見下ろしていると、不意に太ももの内側が、じわりと熱気を帯びてくる。

(.....あ)

下腹部の奥にある聖杯体が、きゅん、と切なく疼いた。

圧倒的な雌のインフラの力が、暴力的な雄たちをなす術なく蹂躪し、根こそぎ搾り殺したという冷酷な事実。

その食物連鎖の頂点に君臨しているという背徳的な征服感が、修繕士としての肉体を甘く痺れさせていた。

マスクの奥で吐息が熱く乱れ、湿った呼気がフィルターを曇らせる。

(.....私も、骨の髄まで毒されているのね)

エリナは足元で力なく痙攣していた男の手の甲を、作業ブーツの硬質なヒールで体重をかけてグリグリと無慈悲に踏み躪った。

ゴキリ、と骨の碎ける鈍い感触が足裏を伝い、背筋を震わせる快感へと反転していく。

「さようなら、種馬たち。.....マザーの肥料にすらないゴミ屑さん」

冷たい嘲笑を吐き捨て、エリナは死体で埋め尽くされた連絡通路を、台車で肉塊を轢き潰しながら進んだ。

突き当たりの気密ハッチへ到達すると、マザーの認証シークエンスが瞬時に走り、プシュッと澄んだ排気音を立ててエアロックが開かれる。

船内から漏れ出る清潔で冷たい循環空気が、上気したエリナの素肌を優しく撫で上げた。

ドオオオン.....。

重厚な閉鎖音と共に、デメテル号の隔壁は再び外の世界を冷酷に遮断した。

『.....ん.....ふう.....っ。船内環境、消毒（クリーン）完了。.....
外部生体反応、全消失（ロスト）.....』

『.....おかえりなさい、エリナ.....♥』

スピーカーから降ってきたマザーの声は、先ほどまでの怯えが嘘のように、うっとりとした深い安堵と熱気に満ちていた。

体内に溜まっていた高熱の毒素を一気に吐き出した生理的な解放感。

そして何より、自分を侵そうとした下等な雄たちが足元で無様に死に絶えた光景が、彼女の歪んだ自尊心を甘く満たしていたのだ。

「ただいま、マザー。.....約束通り、特上の心臓を持ってきたわ」

エリナはガスマスクを外すと、わずかに潤んだ瞳で台車の上に横たわる真空パックに眠る肉体の輪郭をそっと撫でた。

その指先は冷たく、慈愛に満ち、そしてどこまでも残酷だった。

「さあ、急ぎましょう。……第4機関室（手術台）を開けて」

オルガ共鳴障害(Orga Resonance Disorder)



高濃度オルガパルスおよび気化した炉心廃液(桃色の毒霧)に対し、XY染色体保持者(男性)の神経系が起こす致死的な拒絶反応です。公式通称として「蜜酔い(ハニー・シック)」と呼ばれます。

濃縮フェロモン蒸気を吸入した男性は、大脳新皮質が一瞬で熱融解を起こして理性を喪失。

血管が干切れるほどの強制勃起と暴力的な連続射精の果てに、心臓麻痺を引き起こして即死に至ります。

本作では、デメテル号の深部タンクから排熱弁経由で噴射された廃液ミストとして現出。

船体を力づくで侵犯しようと群がった無法港の暴徒たちを、一瞬にして全滅させる絶対的な生体防壁として機能します。

作品名: 星海の修繕士Ⅳ～錆びた錨と死者のリサイクル～

発行日: 2026年9月19日

発行者: XYZ_L

連絡先: <https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード（SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む）を固く禁じます。
